

経営経済数学

凸集合

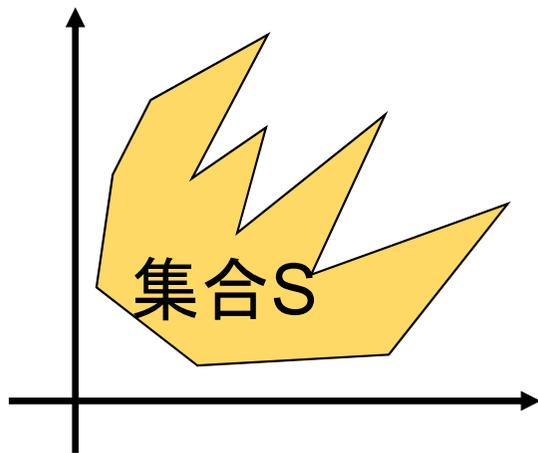
塩浦昭義

東京工業大学 経営工学系

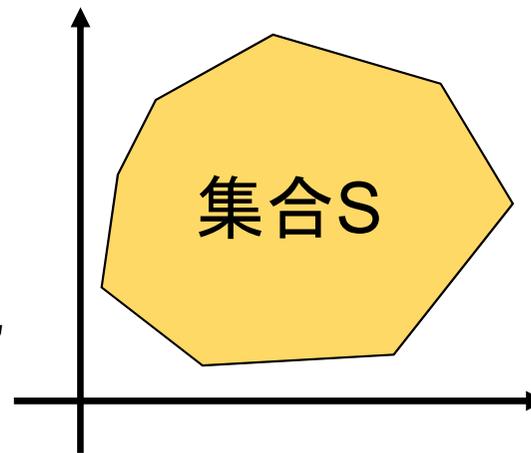
shioura.a.aa@m.titech.ac.jp

凸集合・凸関数のありがたみ

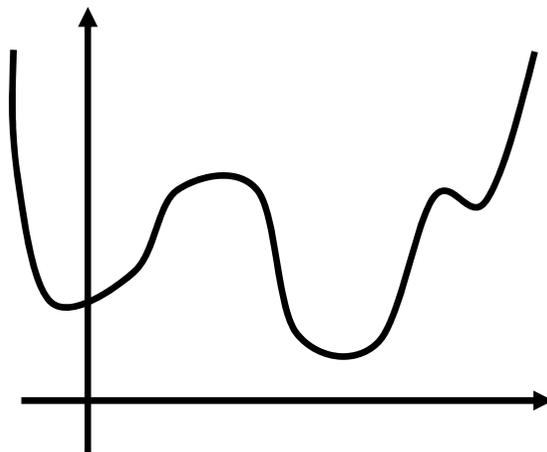
- 集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ の上で関数 $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ を最小化・最大化する
--- S, f がどのようなときに問題が解きやすい？



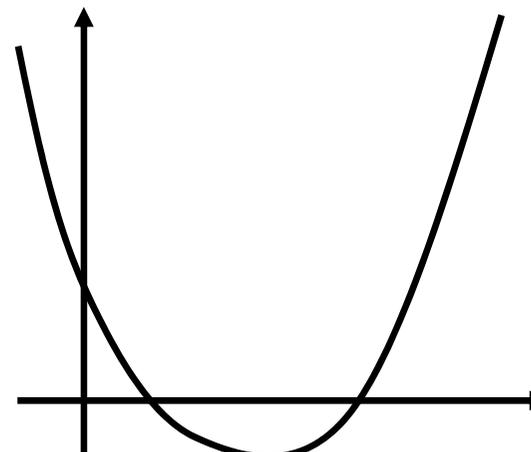
集合Sの上で
 $x+y$ の最大化



このような
集合・関数
は様々な
分野で
しばしば
現れる



関数の最小化

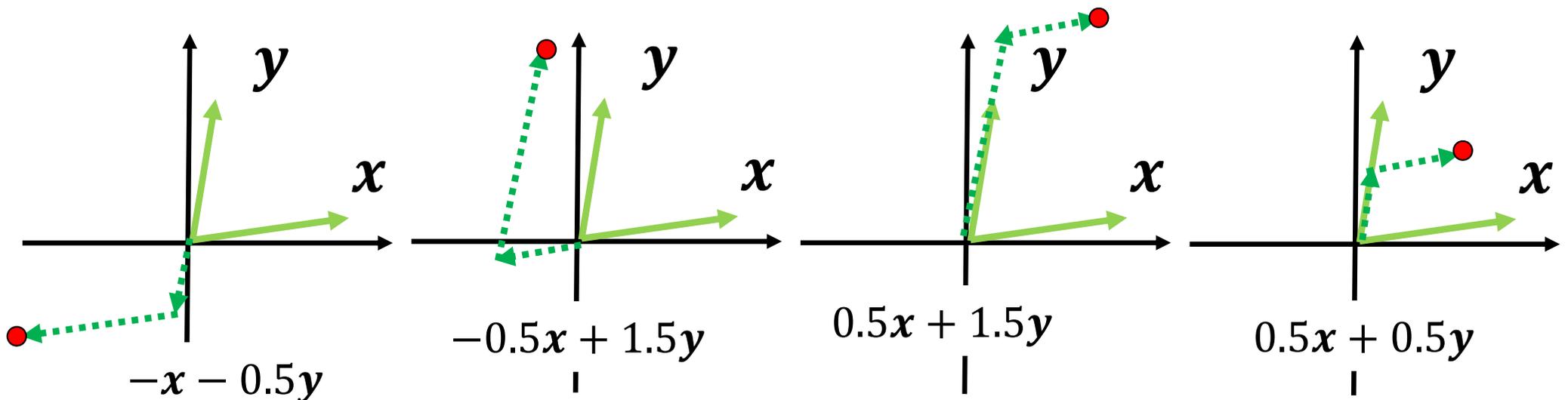


2つのベクトルの「結合」

定義: 2つの実ベクトル $x, y \in \mathbb{R}^n$ の

線形結合 --- 実数 α, β を用いて $\alpha x + \beta y$ と表されるベクトル
とくに,

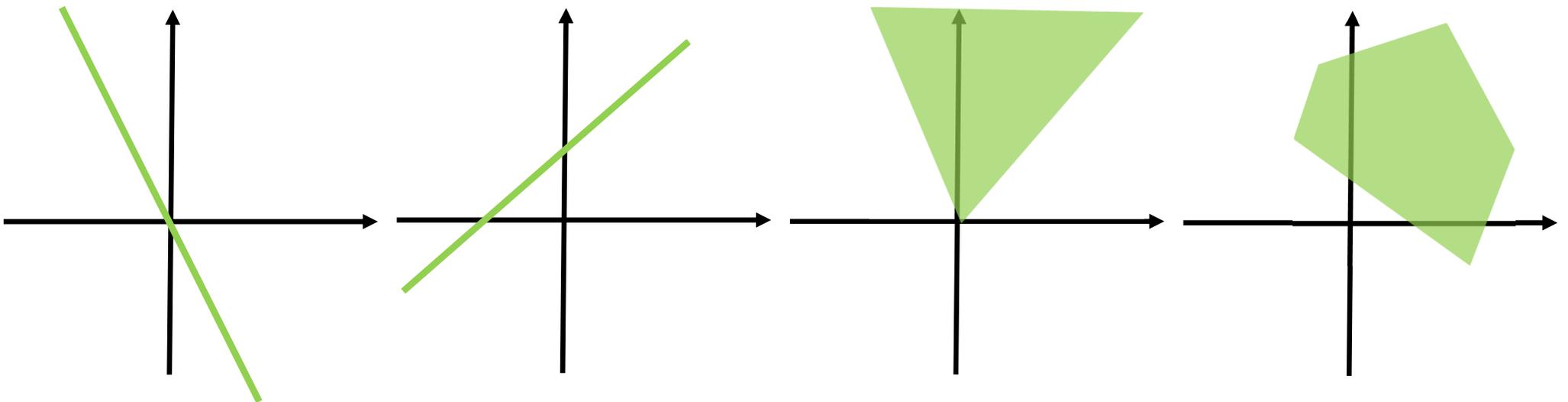
- $\alpha + \beta = 1$ のとき $\rightarrow \alpha x + \beta y$ はアフィン結合
- $\alpha \geq 0, \beta \geq 0$ のとき $\rightarrow \alpha x + \beta y$ は錐結合 (非負線形結合)
- $\alpha + \beta = 1, \alpha \geq 0, \beta \geq 0$ のとき $\rightarrow \alpha x + \beta y$ は凸結合



「結合」に関して閉じている集合

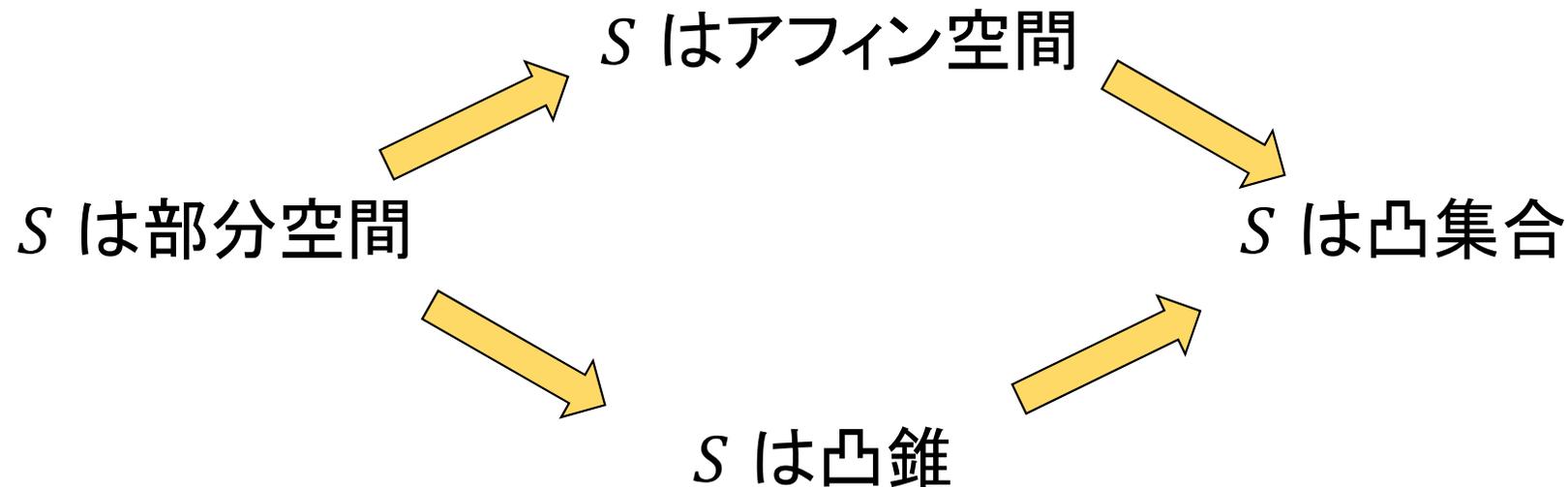
定義: 集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ は2つの実ベクトル $x, y \in \mathbb{R}^n$ の

- 任意の $x, y \in S$ の線形結合に関して閉じている $\rightarrow S$ は部分空間
(つまり, $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \alpha x + \beta y \in S$ が成立)
- 任意の $x, y \in S$ のアフィン結合に関して閉じている
 $\rightarrow S$ はアフィン空間
- 任意の $x, y \in S$ の錐結合に関して閉じている $\rightarrow S$ は凸錐
- 任意の $x, y \in S$ の凸結合に関して閉じている $\rightarrow S$ は凸集合



4種類の集合の関係

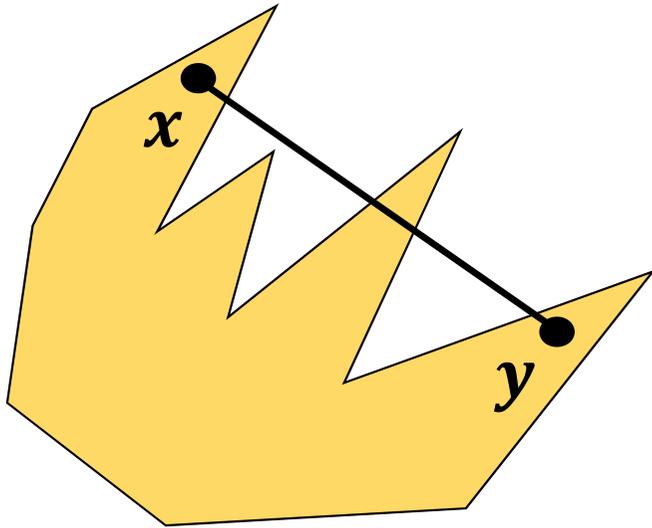
命題: 集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ に対し, 以下が成立:



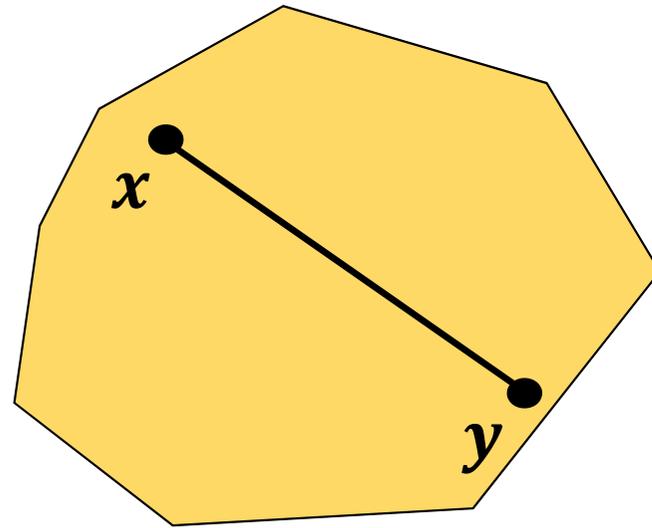
凸集合

- 定義: 集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ は凸集合

$$\iff \forall x, y \in S, 0 \leq \forall \alpha \leq 1, (1 - \alpha)x + \alpha y \in S$$



凸集合ではない



凸集合である

※ 空集合 \emptyset や空間全体 \mathbb{R}^n も凸集合

凸集合の性質

定理11.1: 凸集合の族 S_λ ($\lambda \in \Lambda$) の共通部分 $\bigcap_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda$ は凸集合
(証明は定義より(ほぼ)明らか)

※集合 Λ は非可算無限集合でもよい

定理11.1の系: 任意の集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ に対し,

S を含む(包含関係に関して)最小の凸集合 S^* が存在する.

[「最小」の意味] S^* は S を含む凸集合であり,

S を含む任意の凸集合は S^* を必ず含む

(証明) S を含むすべての凸集合 S_λ ($\lambda \in \Lambda$) に対し,

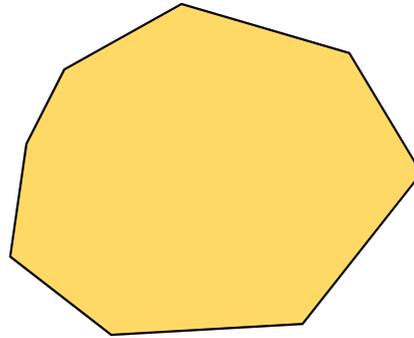
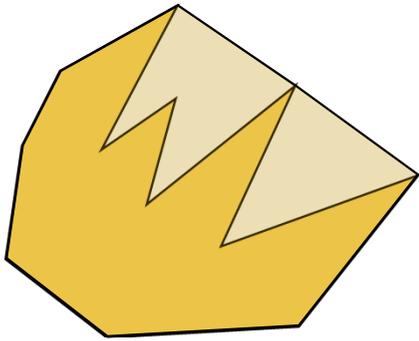
$S^* = \bigcap_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda$ とおく \rightarrow 任意の凸集合 S_λ は S^* を含む.

$\therefore S^*$ は最小の凸集合. ■

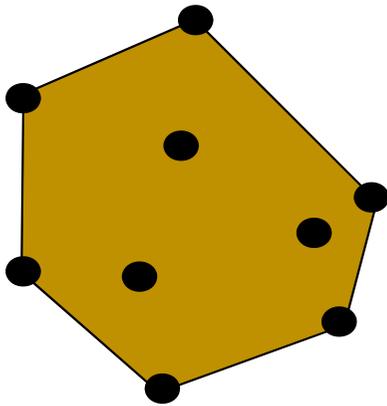
集合の凸包

定義: 集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ の凸包 $\text{co } S = S$ を含む最小の凸集合

※ 凸包は閉集合とは限らない



凸集合の凸包
= もとの集合そのもの



2次元ベクトル集合の
凸包は凸多角形

多数のベクトルの「結合」

線形結合, 凸結合などは, 3つ以上のベクトルに対しても定義可能

定義: m 個のベクトル $\mathbf{a}^1, \mathbf{a}^2, \dots, \mathbf{a}^m \in \mathbb{R}^n$ の

線形結合 --- $\alpha_1, \dots, \alpha_m \in \mathbb{R}$ を用いて $\sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$ と表されるベクトル
とくに

- $\sum_{i=1}^m \alpha_i = 1$ のとき $\rightarrow \sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$ は **アフィン結合**
- $\alpha_i \geq 0 (i = 1, \dots, m)$ のとき $\rightarrow \sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$ は **錐結合 (非負線形結合)**
- $\sum_{i=1}^m \alpha_i = 1, \alpha_i \geq 0 (i = 1, \dots, m)$ のとき $\rightarrow \sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$ は **凸結合**

「結合」に関する性質その1

命題: 集合 $S \subseteq \mathbb{R}^n$ に対し以下が成立:

- S が部分空間 $\rightarrow \mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in S$ の線形結合は S に含まれる
- S がアフィン空間 $\rightarrow \mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in S$ のアフィン結合は S に含まれる
- S が凸錐 $\rightarrow \mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in S$ の錐結合は S に含まれる
- S が凸集合 $\rightarrow \mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in S$ の凸結合は S に含まれる

(証明の概略) いずれも $m = 2$ のときは定義より明らか.

$m > 2$ のとき: 帰納法で証明.

例えば凸集合の場合, 次の式より, 帰納法の仮定を使える.

$$\begin{aligned} \mathbf{x} &= \alpha_1 \mathbf{a}^1 + \alpha_2 \mathbf{a}^2 + \dots + \alpha_m \mathbf{a}^m \\ &= (1 - \alpha_m) \left\{ \frac{\alpha_1}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^1 + \frac{\alpha_2}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^2 + \dots + \frac{\alpha_{m-1}}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^{m-1} \right\} + \alpha_m \mathbf{a}^m \end{aligned}$$



「結合」に関する性質その2

命題: ベクトル $a^1, \dots, a^m \subseteq \mathbb{R}^n$ に対し以下が成立:

- a^1, \dots, a^m の線形結合全体は部分空間
- a^1, \dots, a^m のアフィン結合全体はアフィン空間
- a^1, \dots, a^m の錐結合全体は凸錐
- a^1, \dots, a^m の凸結合全体は凸集合

(証明の概略) 任意の $x, y \in S$ の $\circ\circ$ 結合に関して閉じていることを示せば良い.

つまり, $x = \sum_i \eta_i a^i, y = \sum_i \gamma_i a^i$ の $\circ\circ$ 結合 $z = \alpha x + \beta y$ が m 個のベクトルの $\circ\circ$ 結合 $z = \sum_i \lambda_i a^i$ という形で表現できることを示せば良い. ■